

令和7年度 第1回 富山県幼児教育推進連絡協議会 会議録

1 開催日時 令和7年7月14日(月) 10:30～12:00

2 開催場所 県農協会館 802 会議室

3 出席者(14名) 50音順

石倉 卓子委員、石田 和義委員、石動 瑞代委員、江本 美紀子委員、小島 伸也委員
小林 真 委員、新村 彰 委員、芹澤 譲治委員、徳橋 曜 委員、沼田 秀和委員、
宮口 克志委員、宮田 徹 委員、森 弘吉 委員、森川 朋子委員

4 会議内容

(1) 開会

(2) 議事 幼保小接続の現状と課題、さらなる推進に向けた方策について

(3) 閉会

5 議事

(中崎教育次長 挨拶)

事務局 ― (委員委嘱状交付)

畠山委員、養藤委員は欠席。

特別委員 白梅学園大学名誉教授 無藤 隆先生は、第2回に参加予定である。

(委員長の選出と承認、副委員長の指名)

事務局 ― (令和7年度 富山県幼児教育センターの取組について説明)

子どもの発達や学びの連続性を確保したカリキュラム実施のための研修の充実

1 幼児期の育ちを確実に小学校へつなぐ訪問研修の実施

架け橋期に関わる様々な立場の方が顔を合わせる機会となっている。

「わくわく・きときと接続ガイドⅡ」の活用を図る。

2 持続可能な実施体制の構築に向けた人材育成研修の実施

幼児教育接続推進リーダー育成研修受講者の負担を減らした。

架け橋期のコーディネーターの育成等に向けて、幼児教育接続研修を開催している。

3 幼児期および幼保小接続期の教育の質の向上、相互理解のための研修の実施

内容・実施方法を見直し、参加したいと思ってもらえるよう工夫している。

幼児教育推進体制づくり

1 関係機関等との連携体制の継続

幼児教育主管課と教育委員会が連携・協力を図っていけるような場づくりを重ねている。

2 市町村単位での幼保小の架け橋プログラムを推進するための支援

地区別幼・小接続研修会に、希望する行政の方も参加できるようにしている。

センターだよりに「幼保小接続」に関する内容を掲載している。

幼児教育接続推進アドバイザーやリーダーが接続研修を受講している。

市町村で幼・小合同研修等を開催するとき、希望に応じて、幼児教育接続スーパーバイザー等を派遣している。

事務局 ― (令和7年度 富山県幼児教育推進連絡協議会 専門部会の説明)

今年度は、枠組を見直し、人材育成部会と架け橋プログラム育成部会の2部会を設置したい。委員は、資料の専門部会の名簿のとおりである。部会長は、人材育成部会には石動瑞代委員、架け橋プログラム推進部会には小林真委員にお願いしたい。

- 委員 一 (人材育成部会 部会長 挨拶)
- 架け橋期や接続について、リーダーが今まで学んだ知見を基にどう進めていくかということも大事だと考えている。また、施設訪問の場で学ぶことが効果的であると、今までの育成部会でも話し合われてきたが、そこに市町村、小学校等が参加し、協議が広がって、深まることが期待される。施設訪問を生かしながら、人材育成を図る方法について検討したい。
- 委員 一 (架け橋プログラム推進部会 部会長 挨拶)
- 架け橋期や接続の問題は、幼児教育の教育課程、保育カリキュラムと小学校の教育課程の構想の仕方が違っている。資質・能力の育成を目指すところは一緒だが、方法や学習内容の構成の仕方が違うので、そこを互いに分かり合うのが、当面の課題と捉えている。5領域それぞれのねらいと内容に沿って、子供が体験してきたことが、小学校の教科学習につながることを相互に理解することが、接続の肝だと考えている。相互理解をさらに推進していければと考えている。
- 事務局 一 (幼保小接続の現状や課題、さらなる推進に向けての方策についての話題提起)
- 幼児教育施設や小学校、市町村の幼保小接続の進め方はさまざまである。実態に応じた支援が必要である。また、昨年度実施のアンケート結果から、受講者の約3分の2が「幼児教育と小学校教育の共通点や相違点について、保育者、教員全体で理解していない、あまり理解していない」と回答しており、互いの保育・教育内容、そして考え方の理解を深めていくことが大切だと考えている。幼保小接続が、無理なく、最大限の効果を生み出せるよう取り組んでいきたい。園・所や学校、市町村の幼保小の接続の現状とさらなる推進に向けて、どのような取組の支援が必要であるか意見を伺いたい。
- 委員 一 研修等で、小学校教員と幼児教育の先生が交流する場が増えてきた。しかし、認識の違いは大きい。カリキュラム編成の仕方等、幼児教育側が学んでいかなければならないこともある。何よりも当事者同士が交流を深めることがとても大事なことだと考える。交流を積み重ねることによって相互理解が進むのではないか。
- 委員 一 実際に訪問研修を受けたとき、近隣小学校の校長先生の参加があった。トラブルを起こした子供について、校長先生がよいところを見付け、教えてくれた。小学校もその子供を大事に見ていくと言われとても嬉しかった。学びになった。
- 委員 一 幼児教育は、子供が成長していく土台になる。非常に重要だと考えている。小学校との接続について、「幼児教育の中でよき学び手である子供を、小学校1年生になったときどう捉えるか」を見直し、学びに向かう力を付けてきた子供が力を発揮できる授業をどう展開していけばよいかについて考えていかなければならない。
- 委員 一 「子供たちが生き生きと小学校生活を送るためには、そのスタートをどうすればよいのか」について幼と小が同じ土俵で協議するために、幼児教育側も小学校がどんな仕組みになっているのか知らなければいけない。合同研修会等で分かり合う場が増えてくるとよい。合同研修会で保育者と教員が同じレベルで語るためには、保育者の質も高くなければいけない。保育の言語化（保育のやりっ放しではなく、振り返って言語化し、整理して人に伝える力を付ける）は保育者側の課題だが、このような力を付けて共に語り合える場が必要だと思う。
- 委員 一 今、幼保小接続が進んで、小学校と幼児教育施設が向き合い、互いの相違に気付くことは大事である。一方で、子供たちが成長していく中で何を学んでいくかについても視野に入れながら、それぞれの立場でやるべきことを理解する必要もある。向かい合って気付き合うことも、同じ方向を向いてこの先どう子供たちが育っていくのか話し合うことも大事だと思う。今、小学校もすごく変わってきている。個別最適を目指しつつ、クラスという大きな集団と個の関係は非常に難しいと思う。幼保側も、一人一

人がよければよいわけではなく、集団の個の関係がどうあることが子供にとってよいのかは課題である。幼と小が同じ課題について学び合っていけば、もっともっとよくなるのではないか。

委員 一 養成校では、小学校教員と保育者になる学生が混ざって講義を受ける科目がある。講義を通して、幼児教育から小学校の生活科等へのつながりに気付いていく。大学教員も幼児教育施設と小学校のそれぞれの実習に関わっているため、異校種との関わりの中での学びが大きい。他県で行われた小学校の全国大会に参加したとき、幼児教育の調査官が遊びと小学校生活科のつながりについて話していた。生活科の指導案にも「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を掲載する工夫がされていた。いろいろな分野から接続ができると考えている。

委員 一 幼稚園へ通う我が子は、急激に成長している。このまま卒園すると思うが、小学校の1年生になるとき、今、成長しているそのままの延長線上に小学校での生活があるとよい。どこの小学校でも、幼児教育での育ちの延長線上に小学校教育があるとよいと保護者としては思っている。

委員 一 そもそも、教育の1丁目1番地は家庭教育。どれだけ幼児教育、学校教育が充実し、カリキュラムがしっかり構築されても、そこに家庭教育が足並みを揃えないとうまくいかない。幼児教育、小学校教育が進められる中で、家庭教育として協力できること、参画できることがあるのではないか。参画できる、協力できる体制を構築された方が保護者には分かりやすい。そのような体制の構築を提案する。

委員 一 訪問研修が前にも増して活発になってきている。それぞれの価値観や方法論、考え方を認め合う場になっており、共感できて嬉しい気持ちが現場から感じられる。また小学校から先生方が参加し、子供に声をかけてくれる。このことが幼児教育の現場に元気をくれている。午前に小学校の先生と協議し、午後は保育者で協議するという研修も行われている。個人的には、どの幼児教育施設も子供の主体性を大切にした保育を行っている。それぞれの子供が大切にされ、子供が楽しい生活、充実した生活を送っている。そのため、訪問研修がとても楽しい。非認知能力について、小学校ではどのように引き継がれているのか、一緒に考えてみたい。保護者とも、子供の意欲を大切にすることや遊びが充実したものになることで、子供が自分の能力を発揮し、学びを深めていくことを共通理解したい。

委員 一 昨年度末にこども計画を策定した。計画の重点取組項目の一つに、「幼児教育・保育と小学校教育の接続等の充実」を掲げ、現在、研修等に取り組んでいる。研修を通して、管理職や担当者が顔見知りになり、話しやすい状態になったことが大変よい。ただ、校区によって、取組に差があることが課題である。また幼児教育側においては、ねらいや目標について根拠をもって説明できる力を付けていく必要があり、そういうことも含めて幼児教育の質の向上が大事だという意見が出ている。

委員 一 幼児教育も小学校教育も教育観は一緒に人格の完成を目指している。認知能力・非認知能力を一体的に育てていく。生きる力をどう育んでいくかが大事である。幼児教育だから、小学校だからという輪切りではなく、どうつないでいくかという視点をしっかり先生方にもってもらい必要がある。一人一人のニーズに応じた教育をどう進めていけばよいのかについて、市内の小中学校、幼稚園も含め、全ての研修会で言い続けてきている。本来の教育に戻らなければならない。保育者と教員が互いに参観する機会が増えてきているのは非常によいことだと思う。相互の参加を通して教育観を磨く機会をさらに充実させていきたい。幼児教育センターが中心となって推進していったほしい。

- 委員 一 医療的ケア児について、他の子供たちとの生活がその子供に与える影響は大きい。医療的ケア児が小学校へ入学するとき、保護者は地域の小学校への入学を希望している。そのため小学校と協議を重ねているが、現段階では入学が難しいとされている。その子供の将来に関わることだと思う。子供にとってよい体制が構築されることを願っている。
- 委員 一 子供に好奇心や探究心をもってもらうことは、非常に重要なことだと思っている。様々な体験の機会を与えることで、子供の興味につながるのではないかな。
- 委員 一 一般の先生はどこまで幼保小接続について理解しているのか。そして研修の場があっても、参加したくても時間が取れなければどうにもならない。そのような現状でどのように幼と小の相互理解を進めていけばよいのか。カリキュラムの話が出たが、幼児教育と小学校教育では何が違って何が同じなのか。小学校の先生方に、幼児は遊んでいるが実は学んでいることを実感として理解してもらえるのか。保護者の巻き込み方としては、県に親学びプロジェクトがある。子供が小学校へ入学していくにあたって、子供の育ちを切らずにつないでいく仕組みを作っていくことが大切だと考える。
- 委員長 一 (御礼と挨拶)
- 事務局 一 (幼児教育センター所長 挨拶)
- (終了)